

より解決することができなかった場合は、両国政府が合意する手続に従い、調停によって解決を図るものとする。

本長官は、さらに、閣下が前記の了解を日本国政府に代わって確認されることを希望する光栄を有します。

本大臣は、さらに、前記の了解を日本国政府に代わって確認する光栄を有します。

以上を申し進めるに際し、本大臣は、ここに重ねて閣下に向かって敬意を表します。

一九六五年六月二二日

日本国外務大臣 椎名悦三郎

大韓民国外務部長官 李東元閣下

*外務省条約局『主要条約集』（昭和四十七年版）、三七三―四〇一ページ

一九七〇（昭和四五）

59 朴正熙大統領「南北間の善意の競争を提議する」（八月一日）

親愛なる国内外五千万同胞のみなさん！

本日は、わが民族が類なき感激と歓喜のなかで迎えた祖国光復の日から、ちょうど四半世紀になる日であります。

二五年前、全国津々浦々で太極旗の波が満ちあふれ、自由解放

万歳の歓呼の聲が高らかにひびいた日、われわれ全民族は秋毫の私心も打算もない純粹な愛國愛族の精神の下に、こそってわが民族再起の門出を喜びわが歴史の新しい光栄を誓ったのであります。

抑圧と隷属を振り切り失われた祖国を回復し、祖先が耐えしのんできた不幸が再び繰り返されないよう固く誓い、

新しく、繁栄する民族国家を建設しようとの夢を抱いだ、その日にたぎった感激と燃え上がった情熱は、永遠にわれわれの胸中に刻まれる不滅の烽火となることでしょう。その日から、はや二五年が過ぎました。

二五年という歳月は、一人の人間が幼児から少年期と青年期を経て、人間としての完成を目の前にひかえた『一世代』に相当する期間であります。これはまた、一民族、一国家にとっても、その間の成長度を厳粛に評価すべき歴史上の一里塚だと私は考えております。

いま、成年韓国の誇らしい姿を中外に誇示しているこの時点でふたたび光復節を迎えるわれわれの感慨は、まことに無量なものがあります。過去二五年間の光復韓国史は一口に言って、まれに見る『激動の時期』であり、苦難と試練の連続でありました。

光復の感激と歓喜が、国土分断の衝激と不幸のなかで一朝にして水泡と消え、

繁栄の希望と期待は、北韓共産主義集団が挑発した残酷な戦乱のなかで、一片の浮き雲のように散ってしまい、

ひいては、政府樹立以後の混乱と停滞は、ついに二度にわた

る政治的激動のうずまきを起こさざるをえなかったものであります。

自らの手でかちとらずに、他力によって与えられた光復を、よくわきまえて消化するだけの主体的な力量が足りなかったわれわれにしてみれば、こうした試練と陣痛は、避けられない必然の結果だともいえましよう。

しかし、こうした苦難は、決してむだなことだったのではありません。われわれは悲劇の前でくじけず、逆境に当たって屈していません。悠久な民族史を通じて、数多くの内憂外患を、粘り強い意志と民族的な抗争によって耐え抜き、祖国の独立を保全してきた根強いわが民族本来の潜在的なエネルギーが、試練克服の途上で、徐々に輝き始めたのであります。

このようにして芽ばえた民族の自覚が結集して、眠っていた生命力と創造力に点火され、民族中興の前進隊列を整備する歴史的転換点となったのが、正にさる六〇年代であります。その後八、九年、われわれは祖国近代化のためにあらゆる努力を傾け、多くの成果を収めました。今日、全世界は、五〇年代の動乱韓国がいまでは新生国発展の模範国家として登場したという新しい認識をもって、わが民族に対し羨望と敬愛の目で見えるまでになりました。

しかし、私が何よりも値高く考え、誇りとしているのは、われわれが収めた外形的な成果よりも、これを達成する過程において、わが民族の無限の底力を再発見し、われわれの意志、われわれの努力をもってすれば、どんな大きなことでも成し遂げうるという自信と誇りに目ざめたことであります。いまわれわれは、六

〇年代に着手した中興の課業を必ず完遂しなければならない、使命の七〇年代にはいつています。

新しい四半世紀の歴史のページが始まろうとするこの瞬間において、われわれはこぞ、またと、過ぎし日の歴史の前轍をふんではならないという決意と、われわれの子孫に輝かしい遺産を伝承しなければならぬという使命感を、よりいっそう高揚しなければなりません。

親愛なる国民のみなさん！

きょう、光復二五周年を迎えて、わが全同胞がひとしく胸を痛め悲しんでいることは、ほかならぬ国土分断の悲劇であります。統一を望む民族的な悲願は、過去四半世紀の間、一日もわれわれの脳裏から消えたことはありませんが、その一方で、統一の展望は数多い難関と障害に妨げられており、決して明るいとは言えないのが現状であります。

その原因はどこにあるのでしょうか。これは一口に言って、金日成とその一派の民族反逆集団が北韓内に構えているからであります。狂信的で好戦的な共産集団は、祖国光復の日から、韓半島全域を暴力で赤化するため終始一貫狂奔してきたのであります。

六・二五動乱の同族相食む残酷さにつづいて、休戦後今日に至るまで、七、八〇〇件を超える武力挑発を恣行し、最近では、無数の武装ゲリラを浸透させているのが、その実証であります。まさに金日成とその一派は、当然歴史と国民の峻厳な審判を受けねばならない戦争犯罪人に違いありません。

それにもかかわらず、彼ら一派は、いわゆる平和統一とか、南

北協商または連邦制や交流などを口にしながら、破廉恥できまり文句の宣伝を繰り返しています。こうした北韓共産集団の底意がどこにあるかということは、すでに青天白日の下にさらけ出されています。

それはいうまでもなく、

彼ら自らが犯した戦争犯罪行為と緊張造成の責任を転嫁しようとしていることであり、

武装ゲリラの侵入事件を偽装、隠蔽して、素朴な一部の人びとをまどわせることにより、感傷的な統一論を誘発させようとする策謀であり、

国際世論を誤導させようと企む策謀であります。

虚偽と欺瞞に満ちたこうした北韓共産集団の見せかけの宣伝を信ずる人は、この地球上には一人もいないと私は断言します。

およそ共産主義の体制は基本的人権の蹂躪と鉄の規律に支えられている全体主義の独裁であり、そのなかでも北韓の金日成体制は、同じ共産圏内においてすらも、ひんしゆくを買っている典型的な極左冒険主義と歴史を偽造する個人人格化が幅を利かせる閉鎖社会であります。

今日の北の地は、こうした専制と恐怖がみなぎっているなかで、戦争準備に狂奔する一つの兵営と化してしまいました。われわれはいま、このように歴史と民族、天倫と良心から目をそむけた凶悪な武力挑発集団を相手にして統一問題に取り組まねばならぬ困難な状況にあります。ここに民族の悲願である祖国統一の難関があるのであります。

しかし、国土統一がいかに切実なわが民族の至上命令であろう

とも同族の流血を強要する戦争だけは避けねばならず、統一の道がいかに険しかろうとも、根強い忍耐と最大の良識を発揮して平和的に解決しなければなりません。

同時にわれわれは金日成一派の戦犯集団が、武力赤化統一の野望を捨てずに、暴力的な侵略を敢行してくるばあいには、断乎としてこれを撃退しうる『力の培養』もまた、怠ってはならないということ深く銘記しなければなりません。

国民のみなさん。

私はすでにいくたびかにわたって、統一努力の本格化は七〇年代の後半期に至って可能だと述べたことがあります。これは、そのときになれば、われわれの主体的な力量が充実し、国際的な条件も成熟して、統一のいとぐちがみつかるものとみたためであり、とくに北韓の閉鎖的な社会体制も、時代のすう勢である自由化の波によって、おのずと変質することになり、またわれわれの自由の力が、北の地にまで満ちあふれることを確信しているためであります。

こうした時期を展望しながら、私は光復四半世紀を迎える意義深いきょうこの席を借りて、平和統一の基盤造成のための接近方法に関する私の構想を明らかにすることにします。

ここには必ずなされねばならない先行条件があります。つまり、北韓共産集団がいまのように侵略的で挑発的な行為を続けている限り、彼らがどのようなことを口にしてもそれは仮面であり、偽装であり欺瞞にはかならないのであります。したがって、緊張状態が緩和されないままでは、平和的方法による統一の接近は不可能であるだけに、何よりもまず、これを保障する北韓

共産集團の明確な態度表示とその実践が先行されねばならないということであります。

したがって北韓共産集團は、武装ゲリラを侵入させるなどの、すべての戦争挑発行為を即刻中止し、いわゆる『武力による赤化統一または暴力革命による大韓民国の転覆をくわだててきた従来』の態度を完全に放棄する』ということを通じて明白に内外に宣言し、これを行動で実証しなければなりません。

こうしたわれわれの要求を北韓共産集團が受け入れ、実践していることを、われわれがはっきり認めることができ、国連によって明白に確認されるべきには、私は人道的見地と統一基盤造成に寄与するのみか、南北韓の間に立ちだかつている人為的障壁を、段階的に取り除きうる、画期的でより現実的な方案を提示する用意があることを明らかに次第であります。

また、北韓共産集團が韓国の民主、統一、独立と平和のための国連の努力を認め、国連の權威と権能を受諾するならば、国連で韓国問題討議に彼らが出席することも、あえて反対しないつもりであります。

こうした私の構想に、もう一つつけ加えたいのは、北韓共産集團に対し『もうこれ以上、罪のない北韓同胞の民生を犠牲にして戦争準備に狂奔する罪悪行為をせずに、より善意の競争、つまり民主主義と共産独裁のうちのどの体制が国民の暮らしをよりよくするか、または、よりよく暮らしている条件を備えている社会であるかを立証する、開発と創造の競争に乗り出す用意はないのか』を聞きたいということであります。

親愛なる国内外同胞のみなさん！

であります。われわれの当面課題である自立経済と自主国防を達成することも民族の団結であり、民族の念願である国土統一を達成することもわれわれの団結された力であります。

国民のみなさん！
二五年前の八・一五に謳歌した、その感激と歓喜を、今後必ず成就される祖国統一のその日に、より力強く謳いうるよう、こぞつて団結して前進しましょう。

＊『朴正熙大統領演説文選集——平和統一の大道』ソウル、大統領秘書室、一九七六年、一四—二二ページ

一九七二（昭和四七）

60 南北共同声明（七月四日）

最近、平壤とソウルで、南北関係を改善し、分断された祖国を統一する問題を協議するための会談が開かれた。

ソウルの李厚洛中央情報部長が一九七二年五月二日から五月五日まで平壤を訪問して平壤の金英柱組織指導部長と会談、金英柱部長を代理して朴成哲第二副首相が一九七二年五月二日から六月一日までソウルを訪問して李厚洛部長と会談した。

この会談で双方は、祖国の平和統一を一日でも早く実現しなければならぬという共通の念願に基づいて虚心坦懐に意見を交換し、たがいに理解を増進させるうえで大きな成果をあげた。

今年、わが国が初めて世界に門戸を開放した一九世紀後半の開化期から、ほぼ百年になる年であります。それから一世紀、わが民族は落後と隷属、戦乱が折り重なった受難の道を歩んできました。しかし、わが民族はこうした試練をよく耐え抜き、いまや、われわれの前には、新しい中興の夜明けがほのぼのと近づいております。これはまさに、中興の最後の機会だといっても過言ではありません。

もう一つわれわれが記憶しておくべきことは、今日から始まる四半世紀が過ぎれば、今世紀の末期になるということであります。西暦二〇〇〇年ごろの世界と、そのなかで大韓民国が位置する座標がいずれにあらうかということを、正確に予言する人はおりません。

しかし、少なくともこのときのわが国は、

——国土統一を成就してすでに久しい強力な民族国家として、
——全国民がひとしく繁栄を謳歌しうる豊饒な先進福祉国家として、

——世界史の主流に堂々と参加し、寄与しうる誇りに満ちた姿に変容していなければなりません。

いまは着実なその準備期間であります。
一九七〇年代はこのように、過去と未来を結びつける、われわれの近代民族史の道程において、民族中興の成否を分ける重要な位置を占めている時期であります。また、この年代の中興事業を成就しうるかどうかは、われわれの力をどれだけ『生産的』な目標に集中させることができるにかかっております。

民族の団結、力の集中これはまさに中興の成否を左右する關鍵

この過程を通じて、双方は、長い間の断絶の結果として生じた南北間、誤解と不信を解消し、緊張の高潮を緩和させ、さらには祖国、統一を促進させるため、つぎのような諸問題について完全な、意見の一致をみた。

一、双方は、つぎのような祖国統一原則に合意した。

第一、統一は、外勢に依存したり外勢の干渉を受けることなく、自主的に解決しなければならない。

第二、統一は、たがいに相手側に反対する武力行使によらず、平和的方法で実現しなければならない。

第三、思想と理念、制度の相違を超越して、まず同一民族として民族的大団結を図らなければならない。

二、双方は、南北間の緊張状態を緩和し、信頼の雰囲気造成するため、たがいに相手側を中傷、誹謗せず、大小を問わず武装挑発をせず、不意の軍事的衝突事件を防止するための積極的な措置を取ることに合意した。

三、双方は断絶していた民族的連繫を回復し、たがいに理解を増進させ、自主的平和統一を促進させるため、南北間で多角的な諸般の交流を実施することに合意した。

四、双方は、現在全民族の大きな期待の中で進められている南北赤十字会談が一日も早く成功するよう、積極的に協力することに合意した。

五、双方は、突発的軍事事故を防止し、南北間で提起される諸問題を直接、迅速かつ正確に処理するため、ソウルと平壤間に常設直通電話を引くことに合意した。